

テキスト 『ベートーヴェンの生涯』 片山敏彦訳

二〇一六年四月二十三日 (土) 午後二時—四時 作成 清原章夫

今月の音楽

一・ベートーヴェン(独・一七七〇〜一八二七年) オーストリア軍歌 WoO. 122 (WoO: Werke ohne Opuszahl) 作品番号なしの作品は、一九五五年にキンスキーとハルムによって編集された。作品番号は一三八まであり、作品番号なしは二〇五曲が収録されている。)

(一) 演奏 Heinrich-Schutz-Kreis Berlin (演奏時間: 約三分)

(二) 曲目解説 歌詞はヨーゼフ・フリーデンベルグ(一七八一?〜一八〇〇)による。彼はヴィーン義勇軍のちの皇王室歩兵連隊において少尉だった。歌詞の大意は以下のとおり。「名声と給金のためでなく、ただ平和と幸福のために闘おう。戻ろう、わが家の炉端に。善き民に自然の祝福あり。正義なりわれらの戦い。勝利はわれらにあり。」

「一七九二年十一月にベートーヴェンがボンを発つたのはちょうど戦乱がボンへ侵入して来たのと入れ違いだった。彼は、当時のドイツの音楽首都であったヴィーン市に落ちついた。ヴィーンへ赴く途次、彼は、フランスに向かって進軍するヘッセンの軍隊に行き遭った。彼は確かに愛国的感情に憑かれた。一七九六年と九七年とに、彼はフリートベルク作の二つの戦争詩を作曲した。一つは『出征に際してのヴィーン市民への告別の歌』であり、他は合唱歌『われらは偉大なるドイツの民』である。しかし彼が「革新」の敵たちを歌おうとする努力は甲斐なきことであった。「革新」は世界を征服し、またベートーヴェンをも征服したからである。」(『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫二十六頁)

二・ベートーヴェン(独・一七七〇〜一八二七年) 交響曲第六番へ長調 作品六十八『田園』

第一楽章「田舎に到着したときの愉快な感情の目覚め」

(一) 演奏 カルロ・マリア・ジュリーニ:指揮 オルケストラ・ジョヴァニレ・イタリアーナ(演奏時間: 約十分)

(二) 曲目解説 標題は、初演時に使用されたヴァイオリンのパート譜にベートーヴェン自身の手によって「シンフォニア・パストレッツラあるいは田舎での生活の思い出。絵画描写というよりも感情の表出」と記された。ベートーヴェン自身がタイトルを付けた唯一の交響曲である。さらに、各楽章についても次のような標題が付されている。第一楽章「田舎に到着したときの愉快な感情の目覚め」 第二楽章「小川のほとりの情景」 第三楽章「田舎の人々の楽しい集い」 第四楽章「雷雨、嵐」 第五楽章「牧歌 嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」

ロランは、『ベートーヴェンの生涯』の中で『田園』について以下のように述べている。

「この深い静穏も永続する運命を持たなかったが、それでも恋愛の幸福な影響力は一八〇年に至るまでつづいていた。彼の天才からその頃の最も完璧な幾つかの果実を作らせたところの自己統御のちからを確かにベートーヴェンはあの恋愛に負うている。すなわち古典的悲劇といふべき『第五交響曲』や、夏のひと日の神々しい夢想である『田園(第六) 交響曲』やが、その果実であり、そして、また、シェイクスピアの『嵐(テムペスト)』に靈感されて生まれ、彼自身が自作の奏鳴曲(ソナータ)のうち最も強いものだと見なしていた『熱情奏鳴曲(アパッショナータ)』は一八〇七年に世に現われて、テレゼの兄に捧げられのであった。」(『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫三十九頁)

「自己の内部へ閉じこもり^{*}、一切の人々から切り離された彼は、ただ自然の中に浸ることだけを慰めとした。「自然がベートーヴェンの唯一の友であった」とテレーズ・フォン・ブルンスヴィックはいつている。自然が彼の安息所であった。一八一五年に彼を識ったチャールズ・ニートがいつているが、彼は、ベートーヴェンほどに花や雲や自然の万物を完全に愛する人間を見たことがなかった。自然はベートーヴェンが生きたための不可欠条件のようだった。「私ほど田園を愛する者はあるまい」とベートーヴェンは書いている「私は一人の人間を愛する以上に一本の樹木を愛する……」「……森や樹々や巖が返し与える木魂（こだま）は人間にとつてまったく好ましいものだ……」彼は毎日のようにヴィーンの郊外を散策した。暁から夜まで帽子もかぶらず日光の中または雨の中を、独りで田舎を歩き廻っていた。「全能なる神よ！——森の中で私は幸福である——そこではおのおのの樹がおんみの言葉を語る。——神よ、何たるこの壮麗さ！——この森の中、丘の上の——この静寂よ——おんみにかしずくためのこの静寂よ！」（『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫 五十一〜五十二頁）

^{*}ベートーヴェンの聾疾に関するリヒアルト・ヴァーグナーの立派な叙述参照。（『ベートーヴェン』一八七〇年）

〔訳者（片山）はヴァーグナーの『ベートーヴェン』からここに次の部分を訳出する——〕
「……かくて天才的精神はあらゆる「己れの外」から解放せられて、まったく己れにおいてあり、己れの内に在る。あらゆる現象の根柢を内的視力で見ることのできる人間が当時のベートーヴェンを視たと仮定したら、その人間には何たる奇蹟が見えたことであろう。その人間は、人々に立ち交じつて歩いている一世界を見たことであろう。——換言すれば歩いている人間としての世界の本質自体 *das Ansich der Welt als wandelnder Mensch* を！」

今やこの音楽家の視力は内部へ向かつて照った。今や彼は、彼に内在する光に照明せられて数々のすばらしい反映となつて再び彼の心へ把握せられるに至るような性質の現象へも視力を向けた。今やただ諸物の本質だけが彼に語りかけることとなつて、その本質は、美の静平な光に包んでそれらの事物を彼に示すようになった。今や彼は理解する、森を、小河を、牧場を、碧々とした大気を、快活な群衆を、恋し合っている男女を、鳥たちの歌を、雲の列を、嵐のとどろきを、そして淨福のうごきを持つ静かさを。そこでこの不思議な朗快が彼の観照と形成との作用へ浸徹するのであるが、この朗快は彼をまつて初めて音楽の所有（もの）となつた。もともとあらゆる音にあんなにも固有な特質である嘆きさえもが、軽やかになり微笑となる。世界がその子供らしい無邪気さを再び取りもどす。「今日おんみら我れと共に天国にあれ」——『田園交響曲』を聴く者は、誰しもあのキリストのことばが自分に向かつて呼びかけているのだと感じないではいられまい！……」（『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫八十四〜八十五頁）



田園交響曲を作曲している
ベートーヴェン
(1834年チューリヒ)

